

宿場町寸話

5. 東海道枚方宿五十六次 (2)

2025 年 9 月 1 日

堀家 啓男

2. 東海道枚方宿の構成

枚方宿は、町場として基盤が出来ていた三矢村、岡村を中心に新興の岡新町村、泥町村を加え、4村の構成とされました。守口に残る古文書で、守口宿が大坂夏の陣の翌、元和2年(1616)に宿駅とされたと記述され、枚方宿の設置も同時期と推定されています。

構成村名に枚方がないのに「枚方宿」と名付けられたのには、基盤となった戦国末期の「枚方寺内」の町の歴史、商工業者ら町衆の活躍の積み重ねを由緒に「枚方宿」としたのでしょう。

枚方宿は東海道各宿と同じく百人の人足と百疋の継ぎ馬を用意する公儀の「宿駅」とされ、諸侯の参勤交代の駅務を勤めました。

三矢村には「本陣」と称した大名の宿泊施設や、人馬の継立を行う「問屋場」が置かれ、大名や幕府役人の通行を助めました。これらの宿行政を担当する「宿役人」は4村の村役人から選ばれました。

宿の東の出入り口、京都側は「東見附」、西の大坂側は「西見附」と呼び、茶店がありました。土塁が描かれた絵図が残り、当初は防御設備があったようです。

宿内の建物は始め藁葺、後には防火に適した瓦葺の旅籠屋や商人宿、煮売り屋、商店が軒を連ねました。往還筋は約1.5キロにわたり、遠見遮断、蛇行、柵形など城下町に似た、見通し困難、直進できないという特徴を有していました。幸いにもその道筋はいまも鮮明に残り、三矢の淨念寺前、柵形の一角に立てば近世、宿駅時代の雰囲気を感じることができます。

枚方宿4村も他村と同様に年貢を納めました。それに加えて宿駅業務を勤めたため、幕府の援助はありましたが村の負担は大きかったようです。一方、枚方宿周辺の枚方、交野、寝屋川の28カ村に人足動員など宿御用を支援する「助郷(すけごう)」制度が適用され村々を苦しめました。

淀川沿岸の枚方宿は守口宿とともに淀川舟運や山崎道(西国街道)による経済的影響を受けていました。特に伏見からの客や貨物が、大坂まで直行の船便で下ることが多く、下りの宿泊客や荷物が極端に少なかったのです。宿泊は、陸路でいく上り客にほぼ限られ、宿駅の経営に支障が生じていました。宿ではこの現象を「片宿(かたしゆく)」と呼び、公儀の援助や支援を何度も要請しました。要望はなかなか実現せず、枚方宿に飯盛女が多かったのも宿を支える旅籠屋等の経済活性化の一環とみなされたからです。